

市民が文化を支える

島田 誠

はじめに

社会の仕組みとして「行政」「企業」「市民」という三つのセクターがそれぞれバランスよく役割を担うことが大切です。しかし文化芸術は、「行政」「企業」に依存する傾向が強く、アートの世界をひ弱なものにしています。

私は研究者でもなく、理論的实践者でもありません。1973年、30才の時から27年間、海文堂書店の経営に携わり、ギャラリーを創設、文化支援の様々な試み、まちづくり、神戸市の文化指針の策定などにも関わってきた。2000年から書店経営を離れギャラリー島田を創設、ギャラリー、アート・サポート・センター神戸、文化支援基金の三つの仕組みを重層的に活かしながら、神戸の文化的土壌を豊かにしたいと行動してきた。最初からスタンスが決まっていたわけではないが、次第に「市民の自立」を促し、「市民が主導する文化」へと収斂されて来ていることが明確になってきた。その道筋を、私が関わってきた阪神大震災における「アートエイド神戸」から東北大震災での「アーツエイド東北」を事例として、もう一つの「神戸文化支援基金」の変遷を辿りながら、「市民が文化を支える」実践例と課題について書いてみました。

第1章 震災という断裂とアート

I 神戸にて

阪神淡路大震災の直後には「アートエイド神戸」という市民主導の文化芸術の力で復興を担う広範囲な運動を展開した。震災という緊急時においては従来の組織の枠組みでは対応できないことが多いので、自立した市民による新しい状況に適応する仕組みの実験に取り組んだのです。震災後の単なる文化活動の復興ではなく、震災体験で自らの存在を問い直した芸術家たちが、この地で普遍的な表現としての芸術行為をもって新しい地平へと旅立とうとする活動を支援しようとしたのです。

基本的に活動は芸術文化活動支援が中心であったので最終的な財政の状況だけ報告すると最初の5年間に寄せられた寄付と事業収入の合計は約8千万円、私たちの事業に3千6百万円、芸術文化活動支援の助成に使われたものが4千4百万円となった。

(崩壊の現場から)

震災直後の1995年2月18日、高速道路も、ビルも、港湾も、住居も崩壊し、焼き尽くされ、一人一人の生活も壊滅状態のなかで、私たちは文化の復興を目指して、アート・エイド・神戸実行委員会を立ち上げた。

芸術文化に関わる人間として、最も被災者にお役にたてる行動はなにか？と考えた。

アートには本来、人の心に働きかけ、傷ついた心を癒し、慰め、希望や勇気を与え、人々の心を繋ぐ力があると確信したからだ。

ネーミングについては神戸の文化は自分たちの手で守るという決意と、芸術家自身も神戸の復興のために力を結集するという願いをこめた。

まだ避難所に20万の人が溢れかえり、瓦礫の後かたづけすらはじまったばかり。水道・ガスは未だ80万戸が不通。詩人達はペンを置き、画家達は絵筆を置き、音楽家達は音を出すことさえはばかれる状態だった。

「このような時期に何故アートなのか？」との問いかけには「人が生きていくには空気や水やパンが必要だが、それだけでも生きてはいけない心の問題、すなわち希望が大切だ」と答えた。災害は天災だが、そのあとに続く、孤独死、関連死、自殺などは希望を失ったことによる。

日本敗戦からちょうど50年。「50年目の戦場・神戸」と言われた。アーティスト達もまた親族、友人を、家や楽器を失い失意の中にある人たちも多く、彼等もまた被災者であった。スピードをもって立ち上がることを被災地の現場に近いところで活動することが大事だと考えた。

しかし、アート・エイド・神戸の活動の本質は芸術活動の後方支援であり、活動はすべて個々の芸術家あるいは集団の実践です。私たちは時には発議し、時には助言し、助成することによって、方向性を示したり、繋げたり、後押ししたりしてきた。

具体的な行動について列挙します。

① 震災の4年前に私が立ち上げていた公益信託の文化基金から当初の活動資金の助成を受けた。この文化基金のノウハウが、とても役に立ちました。

② 画家達に呼び掛けて「チャリティー美術展」を長期にわたって開催。その売上の全額、560万円を活動の財源とし「神戸文化復興基金」を立ち上げました。

多くの救援基金が被災地に寄せられましたが、使途が分からない行政や赤十字に寄付するよりは、アートによる「心の救援」を大切に考える方たちの寄付が「アート・エイド・神戸」に寄せられました。行政はどうしても「平等」に配分するために時間がかかり、しかも一件あたりは小額になってしまい、有り難味が実感出来にくい。我々は、意欲をもったアーティストの活動を支援し、彼らを通じてスピーディーに幅広くメッセージを発信しました。

③ 「芸術家緊急支援制度」を作り、被災したアーティスト達へ簡単な申請で10万円／人を贈りました。アーティストたちもまた被災者です、私たちは皆さんと共にあることを伝えました。彼等が希望と元気を取り戻してこそ、文化による復興がはじまるのです。

申請は

- 1 アーティストとして10年以上活動していること
- 2 被害の状況を確認できる同じジャンルの二人の署名
- 3 1年以内に活動を再開する予定があること

を簡単な様式で記入、申請するだけ。2年間にわたり3回の募集で82名に合計730万円を贈りました。

この制度は、阪神大震災のちょうど1年前の1994年の奇しくも同じ1月17日におこったアメリカ、ノースリッジ地震で現地NPOが行なった救援に学びました。「アートエイド神戸」がスタートしてまもなくの3月20日、朝日新聞に「芸術家救援、日米の落差」というニューヨーク在住、芸術文化事業研究家の塩谷陽子さんによる寄稿がありました。塩谷さんと連絡をとって、すぐさま実施しました。

神戸で実践した「芸術家緊急支援制度」は、「アーツエイド東北」でも創設とともに取り組んだものです。塩谷さんは『メセナnote』72号（企業メセナ協議会）2012年3月15日号特集「メセナが広げる「共生社会」」に『「芸術家緊急時救済制度」にみる芸術支援の成熟度』を寄稿し、私、島田にも触れながら、日本における芸術支援が成熟してきたことを感懐をもって書いています。ロサンジェルスでのNPOの事例を神戸が学び、東北へ繋がってきたことが「希望」であれば、私たちの小さな実践例が、また何処かに着床することを願わずにおれません。

被災したアーティストを「緊急支援」することは被災直後には極めて有効ですが、活動が回復されてくるに従って、「活動助成」へと移行します。私たちは既に平時における基金をもっていて、災害時における「神戸文化復興基金」と両輪で回復期を支えることが出来ました。

- ④ 壁画キャンペーン。神戸市役所、神戸国際会館、JR三宮駅、神戸地下街などに。
- ⑤ 震災、三ヶ月後に「阪神淡路震災詩集」を出版。第三集まで、毎年、震災詩集を出版しました。各地で「震災詩朗読会」が開かれ、ここから歌曲、合唱曲、器楽曲が生まれました。
- ⑥ 1996年（震災1周年）から1998年の3年間にわたって、日本の最北端、雪の北海道・釧路で「アート・エイド神戸 イン釧路」1997年には大規模な「兵庫アート・ウィーク・イン 東京」を開催、発信する現代美術「We are hear again」、フェニックス・コンサート「震災詩集から生まれた曲」、一人オペラ「50年を隔てて『広島と神戸 原爆と震災』」などを2週間にわたって展開しました。

1998年には九州・福岡で「兵庫アート・ウィーク・イン 福岡」など震災で生まれた文化を広く発信しました。

こうした活動は「震災で学んだことを伝えたい」「震災を風化させてはならない」というよりも、こうした大規模自然災害は他人事ではありませんよ。「あなた自身の問題ですよ」と促すことであり、アートの力によって、この教訓を学んでくださいという趣旨でした。

そして「アート・エイド神戸」を触媒として、芸術ジャンルを超えたクロスオーバー（交流）が生まれました。詩と音楽、詩と美術と演劇、詩と美術など芸術ジャンルの交流だけに止まらず、芸術と市民活動、企業と芸術支援などかつてない規模で連携しました。仮設住宅支援のボランティアとの連携、高齢者支援、多文化共生、環境団体などの企画に文化は欠かせない重要な要素となりました。こうしたことは、今では普通に行なわれていることですが、当時としては新鮮なことでした。「兵庫アート・ウィーク・イン 東京」（1997年）の総括としてシンポジウム「地震の後に生まれた芸術 クロスオーバーする魂」（注）を開催しました。

「アート・エイド神戸」の果たした役割を整理すると
次のようになります。

- 1 市民みずからが文化を支えるという理念を掲げたこと
- 2 震災後の文化後回しの風潮を打破したこと
- 3 文化を支えるための資金を集めたこと
- 4 その資金によって文化活動への資金助成を行ったこと
- 5 幅広いネットワークによるノウハウを提供したこと
- 6 文化によるまちづくりへの提言を行ったこと

（注）このシンポジウムは、1998年1月16日から2月17日まで、東京、兵庫、福岡で開催された「兵庫アート・ウィーク」の一環として1998年2月7日、神戸・風月堂ホールで開催され冊子として出版しました。

パネリスト 伊勢田史郎（「アートエイド神戸」実行委員長）中西覚（作曲家）河崎晃一（現代美術家）合田幸平（演出家）司会 井上和雄（画家・音楽評論家）

（共同臨死体験）

私は神戸の震災体験を「共同臨死体験」と呼んでいます。

近代都市において、これだけ多くの人々が「臨死」という体験を共有したことは稀です。私達を感じた「ユウフォリア（至福感）」は、現実には挫折、消滅したにしても、そのとき人々が垣間見たアルカディア（未来ビジョン）は、理念として私たちの歴史を確実に回転させる力を持っています。

そして2011年3月11日の東北大震災が起こりました。被害の規模、広域であること、原発事故など、阪神大震災とは様相が異なる惨劇に戦慄し、凝視しました。

ここでいう災害とは自然災害やテロ、飢餓などのカタストロフィ（破局）想定していますが、平時の現在ですら地球規模における環境、食糧、資源は勿論だが、人間としての絶望、虚無などの精神的危機が日常的に進行していて、世界は未曾有の危機にあるという認

識を抜きに芸術は存在しえません。これらを見据え、回避する海図こそが「ユウフォリア・ビジョン」であり、そのことを表現することが時代を超えたアートの役割なのです。

「ユウフォリア・ビジョン」とは

- ①経済至上主義からの脱却
- ②自然との共生社会の実現
- ③それらの総体として、芸術に携わるもの全てが、人間として、さらには表現者としての原点に立ち、自分の存在理由を問い直し、人と人との心をつなぎ、本然を現出するというアートの原点にシンプルに回帰すべきことを指します。

優れた作品は、震災を経験しようが、しまいが関係なくあります。生を凝視し、死を凝視する。人間の存在の在りかたへの認識を問い続けることが重要なのです。

災害は、世の中がどんなふうに変れるか——あの希望の力強さ、気前の良さ、あの結東の固さ——を浮き彫りにする。相互扶助がもともとわたしたちの中にある主義であり、市民社会が舞台の袖で出番を待つ何かであることを教えてくれる。(略) だが、問題は災害の前や過ぎ去ったあとに、それを利用できるかどうか、そういった欲求と可能性を平時に認識し、実現できるかどうか。

レベッカ・ソルニット「災害ユートピア」エピローグ 一廃墟の中の通り道より一

震災のあと夢見たユートピアは、次第に消え去り、レベッカの危惧の通りとなり、むしろ状況は悪化していきます。

かつてわが国に厳然と在った、ともに悲しむとことのできる宗教的な感情や倫理の基盤を根こそぎ崩壊させたなれの果ての欲望自堕落空間に私達は生きているといえようか。切断された日常の切れ目で、あの日、こう問うたはずだ。

信じるに足る社会を、本当に築きあげてきたのか。人と人との信頼しあい、ともに歩むことの出来る社会意識を、私達は培ってきたのかと。

だが、問いは、日常の回復と共に薄れ、やがて問いそのものも消えようとしている。問いの刃は、亀裂によって明らかになったものに向けるのではなく、隠蔽する構造の方に向けるべきである。あの災害はなんであるのか。何度も思い起こすこと、深く想起すること。私達は、ここを、旅立ちの場とし、私的な記憶を通路として歩もうと思う。」

1997年、震災からわずか2年目に刊行された「阪神大震災・記憶のための試み—生者と死者のほitori」（人文書院 P262）の最後「さまざまな声の場所—あとがきにかえて」季村敏夫が記した言葉です。

こうした状況の中で東北大震災が起きました。

阪神から東北まで 16 年の隔たりがあります。直下型地震が都市中心部を直撃した阪神と東北における広域な津波被害と原発災害という性格の違い、そして阪神大震災にはなかった IT における情報の即時性と NGO/NPO など市民活動の定着など社会環境の変化が文化的復興志縁のありかたにも変化をもたらしています。

II 東北にて

文化支援のカウンター・パートナーを探すため震災の約 1 ヶ月後の 4 月 18 日から 3 日間仙台に入りました。曇（みぞれ）降る暗鬱な空の下、瓦礫だらけの「鳥の海」という明媚な地に満開の桜並木。黙示録的風景に足が竦（すく）みました。直接的には何事もなかった側と、何もかもを失った側。残った側の負い目と、失った側の不安。デリケートな対応が求められる由縁です。

東北大震災の 2 ヶ月前に「災害対策全書」（ひょうご震災記念 21 世紀研究機構）に「芸術文化による復興支援策」（注 1）を脱稿し、刊行前でしたが、許可を得て、広報しました。仙台メディアテーク（市の中核文化施設）を拠点にこの小論文を基にミーティングを行い、「東北のことは東北の皆さんが決める」という旗のもとに、被災地・被災された皆さんが文化の力で立ち上がってゆく、そのことにお金でも知恵でもプロジェクトでも志縁しますと伝え「アーツエイド東北」の立ち上げを促しました。私が使った志縁という言葉は、「支＝ささえ」「援＝たすける」という言葉に含まれるどこか尊大なニュアンスを否定し、「志＝こころざし」を抱いた方々の「縁＝ゆかり、えにし」での結びつきを自らの立ち位置とすることの表明で、同じ方向を見て、固定された関係ではなく発想や行動を「共有 (share)」することの大切さを学んだ答えでもありました。

すぐさま、私たちが神戸で実践した「アーツエイド神戸」なら東北でも出来るかもしれないという反応があり、6 月には「アーツエイド東北」が立ち上がり、11 月には一般財団法人となって活動がはじまりました。東北に播いた種は着床したのです。

「アーツエイド東北」の趣旨と事業は

芸術による癒しを求める人、被災地で奔走している芸術家たちがいます。芸術は決して衣食住の足りた環境がなくとも、あるいはそういったものが十分でないからこそ切実に必要とされているのです。復興に欠かせないのは「心」の復興。被災した人、地域での芸術活動、被災地を支援する芸術活動をどうぞ支えてください。

2011 年から 2013 年まで 5 回の助成プログラムを実施。

実施件数:サポートプログラム(助成金 10 万円)採択 49 件、特別助成(助成金 30 万円)採択 3 件。毎年サポートプログラムは年 2 回(春・秋予定)、特別助成は年 1 回(春)実施を予定されています。

これらの事業は「芸術家の緊急支援制度」といわれるものですが、内容的にはすでに「芸術文化活動助成」という段階に入っていると思われま

助成金の額からみれば小さな規模にすぎませんが、地域を知り尽くした人が、実現へのノウハウを含めて関わり、見届けることまでフォローできることが大切です。

2013年夏の東北入りで8回目になります。「アーツエイド東北」関係で5回、うち2回が、神戸で関わってきた「竹下景子 詩の朗読とコンサート」を「アーツエイド東北」と東北大学へ受け渡しをし、それに立ち会うためです。あとはともかく福島、宮城、岩手と自分の足で歩き、眼で見、五感で被災地を感じることを大切にしてきました。

昨年8月16日に仙台メディアテークで「加川広重巨大絵画 雪に包まれる被災地」による「かさねがさねの想い」に出会い、それが今年2013年3月20日から31日までデザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）での「加川広重巨大絵画『雪に包まれる被災地』が繋ぐ東北と神戸」（注2）というプロジェクトの実現に繋がったのです。

それは、さらに2014年に、加川広重さんの巨大絵画「南三陸の黄金」を「雪に包まれる被災地」と同時に展示するという初めての試みに繋がってきたのです。この場で様々な大切なことの問い直しを行いたいと考えています。第1回はアート・サポート・センター神戸が主催しましたが、第2回は実行委員会を組織し、幅広い人や団体と共に関わっていきたいと思います。

（注1） ギャラリー島田HP内の公益財団法人「神戸文化支援基金」から全文をお読みいただくことができます。

（注2） 加川広重 巨大絵画「雪に包まれる被災地」が繋ぐ東北と神戸プロジェクト

2013年3月20日～3月31日 会場 「KIITO」（クリエイティブデザインセンター神戸）
主催 アート・サポート・センター神戸 共催 神戸市・「KIITO」

- ・3月20日（水） 二つのシンポジウム、ダンスパフォーマンス 朗読・演奏
- ・3月24日（日）音遊びの会 音楽家、知的に障害のある人、音楽療法家が共に即興演奏。
- ・3月30日（土）板橋文夫 公開ジャズ・ワークショップ&ソロライブ
- ・3月31日（日）東北支援を続けている音楽家たちによるコンサート
田中泯（たなかみん）「場踊り in KIITO」

（注3） 加川広重、巨大絵画プロジェクト No. 2 は2014年1月5日～17日 デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）にて。巨大作品（5,4m×16.5m）の2作品を同時展示。その作品に抱かれるようにして「東北の今、日本の今」を問い、アートの力を問う。

第2章 芸術文化による社会変革

私が震災を期に取り組んだことは小さな社会変革の装置を地域で稼働させることです。阪神大震災の時にすでに漂っていた社会的硬直、閉塞感がそれを機に露になってきました。そして、それを打破するため自立した市民の活動を促すために特定非営利活動促進法（平成十年法律第七号）が、続いて税制優遇をともなう「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」（平成20年12月1日施行）が施行され、認定されれば自立への門戸が

大きく開かれます。特定公益増進法人など夢のまた夢であったのが、二つの大震災の間に現実のものとなったのです。

私はこの社会制度の改革とともに先駆的な実験装置としての「助成基金」の拡充に向けて歩んできました。

I 人体として

社会を改革してゆく方法を人体に例えれば、

- ① 公的な制度として整備されるものは、いはば「骨格」
- ② ②企業のCSR（社会貢献）や mission によるもの、あるいはメセナ協議会ルートによるプログラム助成は「筋肉」、
- ③ ART NPO やNGOによるものは「動脈」、
- ④ 公益財団法人「神戸文化支援基金」や「アーツエイド東北」など市民や組織化されていないアーティストによるものは「毛細血管」

とたとえることができます。

社会が健康体であるためには、これらがバランスよく存在し循環することが必要です。

これまで「お金」の話をするには、どこか軽く見られたり、場合によっては批判されたりしてきました。しかし、お金を血液の循環（骨格＝心臓）に喩えれば、どれもがかけがえのないものであることが分ります。とりわけ閉塞感にみちた日本の現代社会の血行を良くするためには動脈、毛細血管の役割がいままでにまして重要であり、社会制度的にもそこにむけて整備されてきたのです。血流にたとえた「寄付行為」とは、お金の循環であり、望ましい社会への「投票」であり、その人のかけがえのない「表現行為」なのです。芸術文化活動も支援も人体全体で支えられ、存在するわけですが、私が実践者として選り取った立場は、土壌でありながら省みられることが少なく、未開拓な「草の根」としての「市民メセナ」なのです。

II 想像力とは

ある日、ある時、ある中学校にて。ぼくは語り始めた。（略）

「地球上にさまざまな動物が生きているんだけど（略）、どうも人間だけが持っている能力があるように思えるんだ。ボクがどんな能力をイメージしているか分ってくれる人はいるかなあ」（学生たちの戸惑いの気配が教室に漂った。その時、少し離れて胡坐を組んでいた、男の子が「あしたのことを考える力やろう」と、けっこう大きな声で呟くように言った。牧口一二（ゆめ風基金代表理事）が書いておられた。（特定 NPO ゆめ風基金会報「ゆめごよみ風だより」から）

今日はまだ達成されていないが、明日には実現すると確信すること、そして夢見た明日を実現する力が創造力でしょう。そして「夢＝アルカディア」の中身を問いつけることこそが日々刻々のことでありたい。とはいえ、厳しい現実とどう折り合いをつけるのか。片目で遠く（理想）を見、片目で近く（現実）をながめる複眼思考を大切にしていきたいと思えます。

Ⅲ 文化支援基金の歩み

市民メセナとしての芸術文化支援を始めて 22 年になります。若くして亡くなられた亀井純子さんから 1 千万円をご主人の亀井健さんから託されたことに始まり、様々な曲折をへて現在に至りました。助成に当たっては『新しい価値観をもって未来を切り拓いて行く挑戦的な表現活動』であることを主眼においてきましたが、基金設立 20 周年を記念して、優れたアーティストの継続的な活動や地域における目立たないが優れた仕事に対して **Kobe Art Award** という顕彰事業を始めました。これは顕彰であると同時に活動にたいする助成でもあり、大賞 50 万円、優秀賞 30 万円、地域賞（二団体または個人）で合計 100 万円を贈ります。

顕彰という上から目線の受賞（なんとか紙切れ一枚の賜る式の賞が多いことか）ではなく、受賞の方には、財団からというより市民からの感謝状といったものだと伝えています。

基金の足取りは下記の通りです。

- 1992 年 7 月 23 日 公益信託「亀井純子基金」設立
- 2009 年 10 月 15 日 一般財団法人「神戸文化支援基金」設立
- 2011 年 3 月 3 日 公益信託「亀井純子基金」と合併
- 2011 年 4 月 1 日 公益財団法人「神戸文化支援基金」として認定を受ける。
- 2012 年 20 周年を記念して **Kobe Art Award**. を創設

その足取りは、法制度の改革と軌を一にしており、先端を歩んできたのです。

21 年間の助成実績（公益信託亀井純子文化基金からの累計）2013 年 3 月末現在

| | | |
|-----------------------|--------|--------------|
| 兵庫県下で発表される芸術文化活動： | 145 事業 | 24,150,000 円 |
| 東日本大震災の被災地を励ます芸術文化活動： | | 10,802,591 円 |
| 兵庫県下で発表される芸術文化活動の表彰： | 4 事業 | 1,000,000 円 |
| | 助成合計 | 35,952,591 円 |
| | 基金残高 | 33,797,113 円 |

これらは「基金」を通じた寄付によるもので、「アートエイド神戸」は別途報告した通りです。その他にも文化交流拠点としての非認定 NPO「アート・サポート・センター神戸」を会費（5000 円/年）によって運営しており、会員は約 150 名です。

ギャラリー島田を基点とした、こうした多層的な場が、市民の有する知識、ノウハウ、ネットワークなど様々な非金銭的な資源を含めて、芸術文化を総体として社会に大きく開き創意をもって神戸の文化的土壌を豊かにしてゆく試みに取り組んでいます。

Ⅳ 様々な公益法人の誕生

公益信託から出発して 19 年で公益財団法人へとたどり着きました。公益認定を受ける最後の段階を NPO 法人「市民活動センター神戸（KEC）」に託しました。2010 年に委託、2011 年に一般財団法人に認定、その 3 か月後には公益財団法人の認可を受けました。私の狙いは、KEC が、こうした手続きを習熟し、それが受託業務になるだろうと考えたからですが、

当財団の公益認定の前に KEC が認定 NPO の資格を得、引き続き、自ら「ひょうごコミュニティ財団」を設立し 2013 年 7 月公益財団法人の認定を受けました。この「コミュニティ財団」構想は、阪神大震災直後から私が提唱し、研究会を開催し、神戸都市問題研究所などとともに神戸商工会議所や経済界に働きかけましたが時期尚早で実現せず、震災から 10 年目に刊行された『阪神・淡路大震災 10 年—市民社会への発信』（2005 年 1 月 17 日、文理閣）でも、その必要性を書きました。

兵庫コミュニティ活動支援財団構想

現在を予想できぬままに、書いた私の構想は下記のものでした。

新しい時代を担う市民活動を実質的なものにするために、実現性のある、しかも新時代にふさわしい基金の在り方を提案します。

21 世紀は行政セクター、企業セクター、市民セクターがそれぞれ社会、地域の課題を共同で担わねばなりません。重要な担い手である市民セクターの財政基盤を支援するために「兵庫コミュニティ活動支援財団」の設立を提唱します。

1 特定公益増進法人であること

従来は行政的課題であった領域を市民セクターが担うところに、活動にたいする寄付が企業の場合は損金処理、市民の場合は所得控除ができる当然の根拠があります。

すなわち本財団は特定公益増進法人であらねばなりません。

2 マンション型指定寄付制度

財団に集められた基金が、行政補完的に配分されるのであれば、NGO/NPO は行政にたいして助成待ちという受身の姿勢であることを強いられ、現状と変わることがありません。従って

① 寄付の用途を分野指定出来る。

即ち、教育、環境、芸術などの分野を指定し、財団のプログラムに従って配分を決定出来る。

② 団体指定まで踏み込んで指定出来る

認定委員会を設置し、審査のうえ構成団体登録を行い、更に寄付受け入れ時に事業審査を行った上で、寄付金を受け入れ、即、団体に交付する。次項の「認定事業方式」との違いは、本項は寄付者が寄付先を選定し、運営費を含めた一般寄付であるのに対し、次項は団体が事業を計画し、その事業に対して寄付者を募る点である。

この時の論考では「企業メセナ協議会の特定公益増進法人としての優れた制度を兵庫でも」と続くのであるが、ここでは触れません。

その最後は

以上の 3 項目、すなわち①特定公益増進法人②マンション型指定寄付制度③事業認定制

度の三本の柱を持ったコミュニティー活動支援財団は最強のシステムを言えます。

21世紀の新しい潮流、社会活動の担い手としてのNGO/NPOを包括的に支援をする新しい寄付の文化を創出することができる。この3本柱のどれが欠けてもならない。

そして、その財源については、阪神淡路大震災復興基金の残余財産から基本財産を抛出、運営資金については企業会員、市民会員の会費、および寄付金の一定割合を経費として当てると書きました。

こうして「夢」であり、8年前には構想であったものが「現実」となったことは、時代が追いついてきて、形とする人を得てしだいに結晶を成してきたのです。種を蒔くことは夢見ること。そして水をやり、手をかけること。そのことを慈しむことが夢を現実にしたのです。また、そうした認定を受けることが出来ないNPO/NGOが共同で広報をして寄付を集めるkifu KOBE（注1）、公益認定を受けた財団を経由して寄付を集める「共感寄付」（注2）など、様々な仕組みが誕生しています。この現状を市民社会の実現と単純に歓迎するわけにはいきません。

超高齢社会、人口減少、極端な税収の不足により導入された制度改革は、そのまま新しい市民社会を生み出すわけではなく、未成熟な日本の寄付市場で、熾烈な財源の獲得競争に晒されながら、それを乗り越えてこそその市民やNPO/NGOの自立なのです。

注1 神戸で活躍する市民ファンドのポータルサイト。共同広報事業。

注2 認定NPO法人「しみん活動センター神戸」が運営する寄付を集める制度。此处を経由することによって寄付者は税額控除を受けることが出来る。一定割合を経費として控除して、指定団体へ支払われる。

第3章 芸術文化によるコミュニティーの再生

国、行政組織を上部にいただいた様々な組織体が経済界から地域・住民組織から学術文化、芸術にいたるまで強固に構築されています。それは「原子力村」を語るまでもなく、日本全国を覆う景色です。それはダークサイド（談合・癒着・裏工作）といった既成利害共同体として絶えず蘇る。芸術文化の領域とて同じです。外部に対する閉鎖性 少数意見の封殺は私自身も身をもって体験しています。

多くは説明責任もなければ責任追及もない。あっても隠蔽、捏造などへと逸脱していきま

す。
阪神大震災以降の市民活動の広がりや定着は、自立した市民社会への胎動に違いありませんが、多くのNGO/NPOは国や行政組織との共存を目指すもので、結果的に補完補強に加担する形に陥ることが多く、その関係性を肯定しながらの改革は“中味の改革”にいたらず、“器の改革”に終わる宿命を持ちます。器の改革はむしろ中味の改革を怠る方便として使われ、改革派と思われる学者や文化人も行政の審議会、委員会で批判的な意見を述べても、答申や結論において「批判の意見もあった」と記されて終わる限りにおいて、批判意見も便宜利用されているのです。私自身は阪神大震災を期に、批判すべきは批判するという

radical で independent な立場を固持することを心がけてきましたが、その体験から分かったことは、官僚よりも、本来、知識人や文化人と呼ばれる人々が、異質を嫌い、疎外に加担するということです。自立不羈を貫くことは、容易ではないが、そのこと自体が不可視のなかに隠された Inside と Outside の境界を際立たせ緊張関係を露にすることにおいて、大きな意義を秘めているのです。

この国に決定的に欠けている独立性のある検査、検証、批判といった機能を保証し、旧来の統治構造を結合している癒着関係を解体するため、緊張関係を保持する批判精神をもった自立した多くの市民の存在が欠かせません。その市民が特定目的で結びついた、いつでも出入り自由な小規模共同体を成し、地域に埋め込まれて存在することで上下の関係ではないフラットで多様な価値観を反映させるオルタナティブな文化的風土にしたいものです。

今在る社会的危機に立ち向かい、「文化による社会創造」を実現するためには、その「境界」を **Out-side** へと拡張し、透明性を保持しながら緊張ある関係を築くことが大切です。そのためには、境界を瞬時に超える力をもつ芸術文化の役割が大切で、文化への重点的な投資が閉塞感の濃い地域コミュニティーを再生させる重要な鍵です。その基本的なプラン（提言）は「ニュー・コンパクト～文化振興による地域コミュニティー再生策～」として（社）企業メセナ協議会から提言されています（2009/3/16）。ここで、取り上げるのは、その中の、地域における市民セクターの強化についての試論です。

市民社会というならば、自覚・自立市民による市民力を高めなければならない。そのためにもアートの果たす役割は増々、重要なのです。

I 人材を育てる

アートを愛し、知識、見識、ネットワークを持ったアートプロデューサーやアートマネージャーが育ってきている。大学でもこの種の講座が持たれ、社会人を講師とし、インターンで地域に派遣し、サテライトを持ち、学生の提案を地域が生かし、様々な実践的な交流が生まれている。アーティストを目指す若者も多い。こうした文化的人的資産が蓄積していくことによって、生産であれ、商業であれ、情報であれ、社会全体を文化化していくことになる。そうした人材を雇用の形で戦力化していくことが課題です。しかしながら、イベントという一過性のものを持ち込み、単なる学生の実体験の場として利用する、利用されるという関係に止まらせない視野が必須です。

II 地域を生かす

地域の歴史・風土に根ざす文化的潜在力を、市民の文化に取り組む力によって顕在化する試みは、各地で盛んになってきました。それは伝統産業や、祭り、食、町並み、住民までを含んだ総体的地域固有の資源の再発見でもあります。こうしたアートイベントは地域の魅力を再発見し、人を呼び込む観光資源であり、賑わい作りや経済効果として期待され計画され評価されます。住民が主体であることによって、従来の与えられたイベントから、

持続的な街づくりとして各地に NPO を生み、若者を巻き込み、地域を変えつつあります。アートのためのアートではなくコミュニティを変えていくためのアートを育てていく、すなわちアートをマネジメントすることによりコミュニティをマネジメントする意識をもつことが重要です。文化による「街づくり」は、「にぎわいづくり」という観点に留まるかぎり、限界がはっきりしています。それは「イベント」という薬を打ち続けることとなり、健康体にはならない。地域の意識改革につながり、商店街であれば個店が輝きだし、文化を理解した人材が育ち、地域全体が時代におけるポジションを確定しなければなりません。それを促すのがアートプロデューサーや「文化装置」のもつ「境界性（マージナル）」なのです。オルタナティブであることを地域に組みこむことが極めて重要です。ともすればどこもが成功例に倣い、その結果、人は増えたがゆきづりの観光客が悪貨が良貨を駆逐するように、どこにでもある平準化したものに収斂させ、無個性化が進行し「宴のあと」の虚しさが漂う。神戸市中心部（三宮、元町、北野）がかつての個性を失い、均一化されたチェーン店や、安売り店に侵食されてゆき、スイーツやブライダル一色に染め上げられてゆく。目先の売り上げだけしか追わない小売店や、観光企画に参画するツーリズム企業やメディア企業に収益は回収されていくだけなのです。

地域を「経済」という補助線を引いてしか理解しないから、賑わい、売り上げ、話題といった短期的評価が持ち出され、課題は「さらなる」へと向かう。「文化」というしかりとした「対角線」を引くことで「くらし」や「こども」や「明日」が視野に入ってくるのではないのでしょうか。

III 自立ということ

自立の基本は身銭を切ることです。「独立」は、すべて自前でやることですが、そこまでいかなくとも、少なくとも、まず自分の身を削る、責任も分担も分かち合うことから始めなければならない。アートは容易に権力構造に組み込まれ、補完する役割を担うことになり、既存の社会や仕組みを肯定し、現状の文化を増幅し強化することに繋がっていきます。税金を補助金として「与える」自治体、それを依存する市民、それに偽善的に参加する芸術団体といった構図のなかから真に根を生やした創造的、革新的なものは生まれてきません。

NPO, NGO の定着、税制優遇を受けられる認定 NPO, 公益財団などは新しい時代の要請に即した制度改革による市民社会の自立への促しです。その促しに応じて寄付という形で未来への票を投じ、意思の表明をするのです。私たちはその未来を提示する責任を持たされているともいえます。寄付はお願いではなく参画であることによって創造の場に立会い、プライドにつながっていきます。

IV NGO/NPO のためのファンドレイジングのための装置「ぼたんの会」

しかし、自由で小規模な共同体で出来ることには限りがあります。そこで、新しいファンド・レイジングを提案し、実践しました。それが「ぼたんの会」です。

1 MSI事業

新しいファンド・レイジング（財源獲得）の方法としてMSI事業を提唱し、取り組みました。MSIとは、アーティストと文化活動団体がお互いに助け合う制度でMutual Supporting Institutionの略称です。

優れた舞台芸術公演が集客に悩み、客席がガラガラだったり、招待で埋めたりしている現状を改革するために、チケットの販売を助け、その売り上げの50%を活動資金として還元してもらう発想から始めたものです。すなわち、優れた文化を鑑賞する機会を増やし、その結果として活動資金を獲得することが出来ます。

NGO/NPOのためのファンド・レイジングのための装置「ぼたんの会」

この制度をさらに進めたのが「ぼたんの会実行委員会」の取り組みです。

この取り組みの特徴には

- ・多くのNPO/NGOが協力して、一つの事業に取り組む
- ・事業そのものが社会的な意義をもつ
- ・貢献に応じて収益の還元を受ける
- ・事業を通じて新しい人の交流が生まれ、ノウハウを学ぶなどがあげられます。

会の名称の由来は「牡丹の花」と「ボタン」の意味を重ね合わせています。牡丹は五月初旬に豊麗な花を咲かせますが、寒気にも強く、他の植物が冬季休眠状態に入っている時でも、すでに、地中の根は活動を始め、その朱色の太い芽は逞しく、力が漲っています。「ボタン」は、離れたものを繋ぎ合わせるものです。

「ぼたんの会」の事業は、参加される皆さんが、交流を楽しみ、文化を楽しみながら、次代を担う人材や市民活動団体を財政的に支援することを目的にしています。

神戸のNGO/NPO14団体が「ぼたんの会実行委員会」を結成し、ファンド・レイジングのための「夜会・ぼたんの会」や「1・17 竹下景子 詩の朗読とコンサートの夕べ」、「講演会」「チャリティー美術展」などを主催し、MSI事業方式によってチケット販売の売り上げに応じて40%～50%の還元を受けました。その金額は7年間で15百万円となり、活動を支える財源として有効な方法であることが証明されました。

V 都市文化の階層性

文化の最も基本的な働きは、人間環境への適応を助けること、日常生活の欲求の充足を図ることにあります。その「現実適応」ないし「生活維持」の機能に力点をおくならば、文化とはもともと「実用的なものだ」ということも出来ます。しかし、その実用性を超える働きもまた文化の中に含まれています。現実を批判し導こうとする理想主義的な「超越」の側面を文化は常に備えています。文化の自己懐疑の働きとしての「自省」「自問」であり、「適応」「超越」「自省」がからみあったバランスのとれたダイナミズムが創造の基盤です。

一言で芸術文化と言っても必要に応じて様々ジャンル、役割があり、自己表現として、あるいは社会意識として、社会変革として、様々な文化の階層性を想定することが出来ま

す。

新宮秀夫（元・京大エネルギー研究所教授）の人生「四階建ての家」論（注）によれば、一階には本能的快樂を求める人、二階には快樂の永続を願う人、三階には苦痛を乗り越えた時の喜びを知る人、四階には苦痛にこそ幸せを感じる人が住むという。今の時代は一階に住むことを願う人で溢れ。消費経済はこの住人がターゲット。楽しさを長続きさせるためにそれなりの努力が必要であると二階に住む人、様々な試練に耐えながら、本当の喜びを求める人は三階に。四階には狂気を抱え時代を切り拓く人が住む。もちろん上に行くほど少数です。都市の文化的豊かさ、あるいは創造性とは、それぞれの階層がピラミッド型をなし、バランス良く存在することが必要ですが、消費社会における経済優位がますます強まる中で、主体性を失い、受身の存在に留め置かれ、一階を中心とした、見渡す限りの不毛の荒野を眺めていたくはありません。

（注）『幸福ということ』（エネルギー社会工学の視点から）日本放送協会出版協会

VI 課題

文化とは「日常を生きる形」と定義することができます。備えあれば憂いなし、すなわち日常に出来ないことは非常時にも出来ない。経済や効率に抗して、人のあり方に届くアートの力が平時にもある。危機の時のレスキューとしてではなく日常の体験が蓄積され、あるときには過去の経験が現在の経験を強め、干渉し、新たな経験へと繋がる、そうした過程の全体が具体的な持続として連鎖していくのです。

そのアートのあり方には、様々な様相やレベルがあり、役割が与えられています。私が書こうとしたのは、最も必要でありながら、最も脆弱と思われる自立した市民が支える文化的基盤のことであり、提言し、実現していく市民力を育てるための「装置」についてです。

国や自治体の行政改革や財政困窮によって、あるいは企業が直面する不況によりメセナが見直しを迫られるなど、アートを取り巻く環境は厳しくなる一方です。しかし、一方では成熟社会の中で、人が人として生きるためにアート（芸術）が必要であるという認識も定着してきました。また、企業においてもCSR（社会貢献活動）が重視され、そのためにも「文化力」は重要なイメージであり、また市場であることも自明となってきました。街づくりにおいても同様です。

しかし、奔流のごときアートの流れを支えているのもまた購買から形を変えた「誘導された感動」という「消費」であり「観光」であり、そこでカウントされるのが「集客」であり「経済効果」です。その評価基準を絶対としながら、数限りないイベントが重ねられ報じられています。流行のみがマーケティング、広報手段の発達とともに重視されますが、当然のことですが、流行は流行によって乗り越えられていきます。人間の本质はそう変わらないとすれば「不易」にこそ根源として、絶えず戻るべき地平はあるはずです。私が関わってきた小さな「装置」は孤独に「不易」と呟きながら稼動しています。

見直しを迫られている地域コミュニティーの核としての文化装置、すなわち美術館、文化ホール、ギャラリー、文化教室などの活動を支援するために、制度でも組織でもない、こ

の小さな「装置」が、点在して地域に組み込まれていくことが望ましい。推進エンジンとして働き、メンテナンスを怠らなければ永続的です。組織は、えてして内向的になり保守化し、存続そのものを自己目的化していきます。制度は硬直的になることを免れることは難しいのです。こうした「播かれた種」が育ち、それぞれの大地で根付き、「散水装置」によって緑の大地を蘇らせることを願っています。

VII 切り花を飾ってはならない

「東北学」の赤坂憲雄さんが、こつこつとフィールドワーク（聞き書き）を重ねてこられたことを「農夫としての仕事」と言われています。わたしがやっているすべてが同じことだと感じます。

「播かれた種」が育ち、大地で根付き、「散水装置＝基金」によって緑の大地を蘇らせるのが役割です。「文化＝カルチャー」は、耕された (cult) もの (ure) =精神を耕すことです。

風土や歴史の時空から養分を吸って生い育つ植物のように根が張って逞しく育ったもので、その土壌とは我々の生活そのものしかありません。そこからのっぴきならない独自の表現を生むのがアーティストの仕事なのです。その土壌に根のない、うまいだけの画、指が達者に動くだけの音楽はアートではないのです。自然を畏敬し共生する農夫、漁夫こそがアーティストであるとも言えます。アートは飾り花であってはならず、地域に切り花を飾ってはならない。

参考文献

「アートの力」 中川眞 和泉書院

「コミュニティ財団による市民メセナの評価と展望 - 公益財団法人神戸文化支援基金の事例を中心に」 天野 敏昭. 鶴山論叢 (12) 2013年3月.

『阪神・淡路大震災10年—市民社会への発信』(2005年1月17日、文理閣)

「阪神大震災・記憶のための試み—生者と死者のほitori」(人文書院)

「神戸発 阪神大震災以後」 岩波新書 397

「災害対策全書」(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

「神戸 震災を超えてきた街ガイド」岩波ジュニア新書 489

「蝙蝠、赤信号をわたる—アートエイド神戸の現場から」神戸新聞総合出版センター

お知らせ

本稿は社会文化学会による「社会文化研究」第16号の寄稿したものの原稿です。

本誌では組み方も整理され注釈などの構成も整理されています。

「本誌」そのものはギャラリー島田でご覧いただけます。